

幼児たちから学ぶ

かずかずのこと ⑧

——水色のノートから——

丸 山 ふ み

第三回 松江幼稚園カーニバル

既成の玩具が氾濫する現在、与えられることの多い生活の中で成長していく幼児たちに自分たちで遊びを創り出していた昔の遊びや手作りの玩具で遊ぶことを親と子で経験させようと企画した幼稚園の行事です。

内容は父母の文集である『幼児とともに育つ親の記録』に収録した四歳児の母親、T・Yの感想文で紹介します。

十一月二十九日

カレンダーに印をつけて待ち望んだカーニバル。

今年は地区委員長としてお手伝いさせて頂き幼稚園の楽し

い行事が裏方さんのさまざまな配慮に支えられている事を痛感しました。中でも焼芋係の方のご労苦は、見るもお気の毒な程で長い待ち時間も愚痴れぬほどでした。

子どもの最大の関心もやはり、目前でできていく焼きいもや餅つきでした。餅つきの為に作られた竈が珍らしくて、顔がはてる程燃え続ける薪を、“危い”と何度注意を受けても近づいてのぞきこんでいました。

電動式の餅つきを当然としている子どもにとって童話の中に登場してくる餅つき光景そのままを見て、

「お母さん、あの人ら昔の人やらろ」と聞くしまつ。(中略)
もみがらを使って焼くのが珍らしい焼いもは煙たいのを我慢して並び、フワフワとセーターの上に落ちてくる油煙のおもしろさを見たりして待ちました。そして、やっと両手に受け取った“やきいも”の温かったこと。

竹馬や輪まわし、こままわし、凧あげなど親と子で一日充分遊ばせてもらいながら思ったのは、昔の遊びって素材なようでは、上手になって遊びを楽しめるようになるには、工夫したり考えたりしながら根気よく練習する努力が必要なのですね。

大人だからって、容易にはできませんでした。すぐに上達できないからこそ、おもしろいのかも知れませんか。今はもうお祭りの小道具になってしまったこれらの遊びを、もっと日常の家庭での遊びの中へと入れたいとも思いました。

このように多くの父母が、たった一日の行事であったがいろんなことを感じ、それを文章にまとめられたことで子どもの成長について考えられたことは、その日の幼児たちの嬉しそうな表情とともに私共教師にとっても有意義な一日でした。

しかし、私として改めて気になったことは幼児たちが嬉しそうにしてはいるが、大声を出して笑っているということに合わないことでした。

こまがやっとまわったり、風が上がってもその喜びの表情がなんだかもの足りなく、焼いも係のW先生や係のお母さん達の顔に、ところどころ煤がついて黒くなっているのをみて、ニヤッとするだけです。

それと祖母ときている幾名かの幼児たちの表情の和やかさ

が印象に残りました。土曜日の行事でも仕事をもち母親が出られないために代わって来ていただく若いお祖母ちゃん達がまわりの母親に比べて子どもの扱いの上手なことでした。

幼児たちの言葉や行為の背後にある真の感情を汲みとることはむづかしいことです。幼児と共に過ごして下さる時間が母親より多いということ、幼児のすることを持つ心のゆとりが御経験の中で自然に身についていられるのかと勝手に解釈をしました。

「先生、いろいろ御準備が大変でしょうが続けてやってくなされ（やって下さい）」と深々頭を下げての挨拶をいたしながら、幼児のまわりには幾つかの年齢層の大人が必要だと思いました。

園庭には終日、たき火の匂い、おもちの香りなど平常の幼稚園にない「におい」がただよい、そのことは心の中へ忘れたものを思い出させ人の心を落ちつかせるのだと改めて気付いた一日でした。

（松阪市立松江幼稚園）